

<研究資料>

ダンス映像のプロダクト構造分析： スポーツ鑑賞授業のための基礎的考察

醍醐笑部¹⁾・木村和彦²⁾・作野誠一²⁾

Product-structure analysis of dance video:
Implications for appreciation in a PE class
Ebe DAIGO¹ Kazuhiko KIMURA² Seiichi SAKUNO²

Abstract

The objectives of this study are, 1) to clarify the product structure of a visual sports medium (DVD of ballet) used as a teaching material, and 2) based on past literature, to characterize schematically the functions of this product. The summary of the results is shown below:

To analyze the product structure, the contents of the ballet DVD was categorized into items. These items were ranked according to their reliability, some of them with low reliability were deleted, and remaining items were then subjected to factor analysis. As a result, five factors were recognized: the first was “moving factor,” the second “decoration factor,” then followed by “expression factor,” “background factor,” and “story factor.” Using the results of factor analysis, the product structure of the DVD was illustrated schematically as the relationship between those five factors. Using the results of factor analysis, we tried to present the product structure as a relationship of those factors, and to make an illustration that allows us to understand the structure visually. For this purpose, we applied the “core and surround” concept proposed by Udo (1993) and Chelladurai (1994). The core of the product is the “advantage to see the movements in the DVD teaching materials,” that is, it is the characteristics of the visual teaching materials. In other words, it is what cannot be understood without seeing, and is insufficiently taught with only paper materials. In this study, the moving factor and expression factor were considered to form the “core,” and the other factors were recognized as “periphery.” This illustrated product structure is consistent with the aim of the dance class as a compulsory subject. The present results also confirmed that use of video for a teaching material may provide some merits to the education.

キーワード：プロダクト構造 ダンス必修化 スポーツ鑑賞

Keyword : product-structure, compulsory dance class, sport appreciation

1) 早稲田大学スポーツ科学研究科

1) Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

2) 早稲田大学スポーツ科学学術院

2) Faculty of Sport Sciences, Waseda University

〒202-0021

1.2. Higashifushimi Nishi-tokyo city, Tokyo 202-0021

東京都西東京市東伏見 2-7-5

1. 研究背景

体育のねらいに「生涯スポーツ」という言葉が登場してからずいぶん久しいが、学習指導要領では「合理的な実践」が強調されるなど、現場ではいまだ「するスポーツ」が主な学習内容であることが多い。平成11年度の「我が国の文教施策」では、教育改革の動向の中でスポーツへの多様なかかわりを促進すべく「見るスポーツ」の振興がスポーツ文化を享受するために重要な課題であるとしている。ひとのスポーツへの関わり方が多様化する中で、学校教育にとどまらず生涯教育を見据えた学校体育の変化が求められていく。しかし、学校体育の中でどの程度多様な関わり方がなされているのか、「みる」経験がなされているのかについて知ることは困難である。

友添(2004)は、学校体育の授業づくりについて触れるなかで、「スポーツはそれ自体で、きわめて豊かな学習の可能性、つまりランナビリティを持っています。このことは逆に、スポーツは子供達にとって、多様な楽しさを秘めているということでもあるのです。スポーツとの多様なかかわりから生まれてくる楽しさ、つまり『行う楽しさ』だけではなく、『見る楽しさ』『支える楽しさ』『知る、調べる楽しさ』、このような多様な楽しさがスポーツの魅力である」と述べている。また上原(2002)は「スポーツ体験の違いから今後ますます開くであろう生徒の個人差を考えると、『するスポーツ』だけでなく『見るスポーツ』を内容とする体育は、生徒ひとりひとりのスポーツへの興味・関心を喚起する事であろう」と述べている。

こうした指摘がなされるなか、平成20(2008)年3月告示の新学習指導要領の改訂に基づき、保健体育科では、子供たちの豊かな心と健やかな体をはぐくむために授業時間数を増やすとともに、中学1・2年生において「ダンス」を男女必修で履修させることとする改訂がなされた。しかし、現在指導に当たる教師からはダンス必修化に戸惑う声も聞かれる。ダンスは、もともとヒップホップやジャズダンス、バレエなど子

供の習い事として人気の高いものも多い。そのため、体育教師よりもダンスに親しんできた生徒がいる可能性も高く、教師がダンスに対する生徒のイメージや希望を理解することは必ずしも容易ではない。生徒のダンス経験を踏まえた指導や、するだけでなく見るダンスの授業など新しい知見が必要となってきたといえるだろう。ダンスの授業における様々な取り組みがみられるなか、本研究では「見るダンス」、つまり「ダンス鑑賞授業」の実現に向け鑑賞者のダンスをみる視点について取り上げる。

「スポーツ・プロダクト」及び「スポーツ・プロデュース」の概念を導入した宇土(1992)は、このふたつの概念を着想するに至るきっかけとして体育の学習指導を挙げている。近年では、スポーツ観戦やフィットネスクラブなど「する」「みる」両側面からのスポーツ行動、スポーツイベントやスポーツサービスをプロダクトととらえた研究がなされているが、マーケティングの概念を応用した学校体育経営研究はこれまでのところほとんど見られない。齋藤(1999,p3)は、宇土の概念を用いて「マーケターの立場からすると見る楽しさは並列ではなく中核の便益がどのような構造をもつか明確に知っておくべきだろうし、それを示唆する研究が必要だろう」と述べている。見るスポーツのプロダクトを概念的に説明しているものとして、宇土(1993,p1-6)とChelladurai(1994,p7-21)があげられる。この二者に共通しているのは競技の勝敗、ゲーム性、ドラマ性を中核として、その周辺にスポーツ以外の要素を同心円状に配置したプロダクト概念を提唱している点である。原田(2004,p40)は、コトラーの製品構造の中核と拡大の概念を援用したマリンの図を引用し、スポーツ観戦のプロダクトを「スポーツプロダクトの中核要素と拡大製品の事例」として図式化している^{註4)}。

コア(中核)の部分は“event experience”と呼ばれ、ゲームフォーム(ルールと技術)、選手、用具、ベニュー(場所)の4つの中核要素に分類している。齋藤(2004,p29)は、宇土の提唱したスポーツプロデュース論を中心に研究の流れを整理し、みるスポーツの中核を考える際、「(す

るスポーツについて) プレイヤーにとっての〈価値〉はスポーツの特性に触れることであり, それを目指すことがスポーツプロデュースの目的として確認できたが, みるスポーツについてはどうであろうか. 観戦者はただ競技を観戦するだけであり, 直接スポーツの特性に触れることができない. 観戦者がただ何気なく観戦するだけでは, 受動的な行為にとどまり主体的なく価値の形成に至らなくなる」と指摘し, みるスポーツのプロダクト構造分析やプロデュース論といった研究の知見を蓄積していくことが, スポーツの文化的価値を高めることにもつながるとしている. 以上より, 本研究ではスポーツプロダクト研究あるいはスポーツプロデュース研究の契機であるにもかかわらず, 今までほとんど対象とされてこなかった体育授業をとりあげ, スポーツ鑑賞授業の実施を見すえてダンス映像(DVD)のプロダクト構造を分析する. ここで, スポーツ鑑賞ということについて言及しておく必要がある. 現在, 齋藤(2004,p29)の指摘からも示唆されるように, スポーツ観戦ではただみるだけの受動的な観戦ではなく, 自ら興味を持って様々な側面に注目することや, その後の行動に影響を及ぼす能動的な観戦が期待されている. そこで, 本研究ではこれまでの観戦と区別し, スポーツをみることを「スポーツ鑑賞」とする. 大辞林において鑑賞とは「芸術作品を味わい理解すること」とある. 一方, 観戦とは「戦いの様子を視察すること」「試合を見物すること」となっている. したがって, 「スポーツ鑑賞」は, 直接スタジアム等へ出向き試合をみる, テレビなど媒体を通してみる「スポーツ観戦」とは多少異なるものとして使用した. スポーツ観戦の「みる」行為そのものを指すのではなく, 「みる」と同時にそこに存在する背景や物語性も含め「楽しむ」行為, 「スポーツをみることによって, その戦いの様子だけでなく, 魅力を味わい, 理解する」行為であると定義する. スポーツ鑑賞において何をどのように経験して(見て)楽しんでいるのかについて, この「何を」の部分のスポーツプロダクトととらえ構造的に分析することは, スポーツ鑑賞授

業の工夫・改善に取り組む教師に対して貴重な示唆を与えるのではないかと考える.

II. 目的

本研究の目的は, ダンス映像のプロダクト構造を明らかにすることである. ダンス映像(DVD)を用いた鑑賞授業を想定し, 鑑賞者の見かたにはどのような側面があるのかについてスポーツプロダクト構造の概念を用いて整理をする. 本研究はスポーツ映像の鑑賞にあたって解説を併せ行い, その解説の種類によって鑑賞者にどのような態度変容がもたらされるかを検討するための, いわば前段階にあたる研究である. さらにダンス映像を用いたスポーツ鑑賞授業の実現を目指すものである. 具体的には, ダンス映像のプロダクト構造を明らかにするだけでなく, プロダクト構造把握の手順, および明らかにされたプロダクト構造について先行研究をもとにその特徴に関する考察を行う.

III. 方法

1. 予備調査

プロダクト構造を分析する項目を作成するにあたり, 本研究の予備調査としてW大学保健体育授業「バレエ基礎」において鑑賞したクラシックバレエDVD^{注1)}の感想について尋ねる自由記述式の調査を行った^{注2)}. 本研究において作成を試みるバレエ映像のプロダクト構造は, 今後バレエクラスにおいて鑑賞授業を行うための基礎資料となるため同様の鑑賞の機会があった授業の受講生を対象とした. 質問紙はDVD鑑賞後に一斉配布しその場で回答を求めた. 回収数は107部であった. かかる後, これらのデータにChasen(自由記述の解析ソフト)による形態素分析^{注3)}を施し, 出現頻度が2以上の単語が含まれる文を内容別に分類し, 特定の作品にのみ対応する単語は一般化させた. 以上の手順で得られた30項目にDVDの作品解説から導かれ

た6項目を加えた、計36項目が、本調査の質問項目である。

2. 本調査

本調査では、「あなたはバレエを見るときどのような点に注目しますか」という設問において、表1に示す各項目を用意し、観客がどの程度注目してみたいかについて、「5点=とても注目する」「4点=注目する」「3点=どちらとも言えない」「2点=あまり注目しない」「1点=注目しない」のリッカート型5点尺度による回答を求めた。先行研究では「～したい」という

動機を聞く形式のものが多かったが、本研究では、学校の授業という状況（すべての人が自ら望んで映像を見ているとは限らない）を考慮し、「注目するか」「しないか」という事実と、その程度を問う形で質問紙を作成した。

調査は2010年7月から8月にかけて、ダンス（ジャンルは問わない）を舞台やテレビ等で鑑賞した経験をもつ18歳から25歳の男女を対象に行った。質問紙はW大学ダンスサークル、T大学ダンス部、T保育士養成所にそれぞれ40部ずつ配布し、郵送法にて回収した。有効回答数は84部であった（表2）。

表1：質問項目

1	作品の歴史的背景	19	マイムの意味
2	ダンサーの表現力	20	踊りのないシーン
3	バレエらしいシーン	21	役による踊り方の違い
4	動きの激しさ	22	物語性
5	動きの滑らかさ	23	男性ダンサーの踊り
6	ダンサーの演技力	24	髪飾りや小道具などの装飾品
7	舞台装置などステージ構成	25	バレエ音楽
8	有名なダンサーの踊り	26	回転の美しさ
9	ダンサーの経歴	27	衣装
10	ジャンプの高さ	28	有名なシーン
11	それぞれの役が持つ独特の雰囲気	29	手足の動き
12	コールドダンサーの踊り	30	ダンサー同士の相性
13	ダンサーの柔軟性	31	全体のストーリー
14	動きの軽さ	32	オーケストラ
15	ダンサーの表情	33	動きの美しさ
16	役へのなりきり	34	バレエ団の歴史や組織
17	ステップの正確さ	35	主人公の踊るシーン
18	恋愛のお話	36	技術の成り立ち

表2：調査概要

時期	2010年 7月28日～8月20日
対象	ダンス（ジャンルは問わない）を舞台やテレビ等で鑑賞した経験を持つ18歳から25歳の男女（W大学ダンスサークル、T大学ダンス部、T保育士養成所）
回収数	84部

IV. 結果

1. 基本的属性

するスポーツとしてのバレエ経験,みるスポーツとしての直接鑑賞及び間接鑑賞の機会の有無について回答を求めた.対象者の60.7% (n = 51) が調査時点でバレエを行っており, 過去のバレエ経験も含めると,バレエ経験者が72.6% (n = 61) を占めていた.また経験者は全員がバレエを直接的及び間接的に鑑賞したことがあった.直接鑑賞したことがある回答者にその回数を尋ねたところ,1~5回が43.3% (n = 29),6~10回が19.4% (n = 13),それ以上の回答者は25.4% (n = 17) であった.50回以上と答えた回

答者も9.0% (n = 6) おり,バレエ鑑賞の経験についてはばらつきのある集団と考えられた.間接鑑賞のみをみると調査対象者のほぼ全員が何らかの形でバレエを見ていた.大学でダンス部やダンスサークルに所属する学生はダンスの基礎ともいえるバレエにも興味を持っている可能性が高く,テレビやウェブ上の動画を見ていることがうかがえる.もちろんそうした学生の中には過去にバレエを習い事として行っていた学生も多く,鑑賞の機会を得ている.保育士養成校ではリトミックなどの授業のヒントにするために教師がバレエを授業で見せたことがあるクラスを対象にしたことから,このような結果が出ているものと推測される.

表3：バレエ経験

	n	%
1. 現在、部活・クラブ・教室に所属し、バレエを行っている。	51	60.7
2. 過去に部活・クラブ・教室に所属し、バレエを行っていた。	10	11.9
3. 現在、部活・クラブ・教室に所属し、ダンス(バレエを除く)を行っている。	3	3.6
4. 過去に部活・クラブ・教室に所属し、ダンス(バレエを除く)を行っていた。	3	3.6
5. 現在、過去も、バレエやダンスを行ったことはない。	16	19.0
記入漏れ	1	1.2
合計	84	100.0

表4：直接鑑賞の経験

	n	%
1. チケットを買ってバレエを見たことがある。	67	79.8
2. チケットを買ってバレエを見たことがない。	17	20.2
合計	84	100.0

表5：間接鑑賞の経験

	n	%
1. バレエのDVDやテレビ番組を見たことがある。	82	97.6
2. バレエのDVDやテレビ番組を見たことがない。	1	1.2
記入漏れ	1	1.2
合計	84	100.0

2. 尺度項目の作成

先述した方法を経て調査項目として設定した36項目から、プロダクト構造分析に使用する尺度を作成した。尺度項目の作成にあたり、村上(2006)の尺度開発法をもとに信頼性の検討、因子分析の手続きを行った。まずI-T相関分析、G-P分析によって項目を精選したのち、各項目を削除した際のCronbachの α 係数を算出して尺度の信頼性を確認した。尺度の因子構造は、探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)によって検討した(表6)。

I-T相関分析の結果、全ての項目が合計得点と

の間に相関が認められ削除すべき項目は見られなかった。次に、G-P分析を行ったところ、「回転の美しさ」「ステップの正確さ」「ジャンプの高さ」「動きの軽さ」が尺度項目として不適當であると判断し削除した。また、因子の独自性を強調するためどの因子にも負荷量が0.40に満たない項目として「ダンサー同士の相性」「ステップの正確さ」「恋愛のお話」「役による踊り方の違い」「有名なシーン」「踊りのないシーン」の6項目を除いた。こうした分析の結果、DVDのプロダクト構造を分析するには表7に示す27項目が採用された。

表6：尺度構成における信頼性の検討

	下位群平均	上位群平均	t値	G-P分析 有意確率	I-T相関 有意確率	項目を削除した 時の α 係数
作品の歴史的背景	2.71	4.05	-4.06	***	**	.939
ダンサーの表現力	4.24	4.95	-4.95	***	**	.938
バレエらしいシーン	3.29	4.67	-4.79	***	**	.936
動きの激しさ	3.19	3.95	-2.53	*	**	.938
動きの滑らかさ	3.90	4.81	-3.33	*	**	.936
ダンサーの演技力	3.67	4.86	-4.37	***	**	.936
舞台装置などステージ構成	3.19	4.10	-2.97	*	**	.938
有名なダンサーの踊り	3.29	4.52	-3.76	**	**	.936
ダンサーの経歴	2.52	3.48	-2.99	*	**	.940
ジャンプの高さ	3.57	4.19	-2.16	*	**	.938
それぞれの役を持つ独特の雰囲気	3.14	4.33	-4.11	***	**	.936
コールドダンサーの踊り	3.00	4.33	-4.64	***	**	.936
ダンサーの柔軟性	3.86	4.48	-3.01	*	**	.939
動きの軽さ	3.81	4.38	-2.13	*	**	.937
ダンサーの表情	3.71	4.67	-3.63	**	**	.936
役へのなりきり	3.24	4.86	-7.01	***	**	.935
ステップの正確さ	3.33	4.29	-2.73	*	**	.937
恋愛のお話	2.29	3.67	-4.79	***	**	.938
マイムの意味	2.19	3.90	-6.76	***	**	.936
踊りのないシーン	2.38	3.76	-4.23	***	**	.937
役による踊り方の違い	2.90	4.62	-6.79	***	**	.935
物語性	3.19	4.43	-4.76	***	**	.937
男性ダンサーの踊り	3.52	4.57	-3.90	***	**	.936
髪飾りや小道具などの装飾品	2.86	4.14	-5.06	***	**	.937
バレエ音楽	3.52	4.43	-3.76	**	**	.937
回転の美しさ	4.14	4.62	-2.10	*	**	.938
衣装	3.86	4.57	-3.14	*	**	.938
有名なシーン	3.24	4.57	-5.70	***	**	.937
手足の動き	3.67	4.76	-3.94	***	**	.936
ダンサー同士の相性	2.57	4.19	-6.02	***	**	.936
全体のストーリー	3.29	4.57	-4.86	***	**	.938
オーケストラ	2.71	4.33	-6.93	***	**	.936
動きの美しさ	4.24	4.95	-4.10	***	**	.938
バレエ団の歴史や組織	1.90	3.76	-7.83	***	**	.936
主人公の踊るシーン	3.67	5.00	-4.64	***	**	.936
技術の成り立ち	2.19	3.95	-6.36	***	**	.936

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05

表7：バレエDVDのプロダクト構成項目

1	手足の動き	15	ダンサーの演技力
2	動きの美しさ	16	役へのなりきり
3	主人公の踊るシーン	17	動きの滑らかさ
4	有名なダンサーの踊り	18	ダンサーの柔軟性
5	コールドダンサーの踊り	19	ダンサーの表情
6	男性ダンサーの踊り	20	衣装
7	マイムの意味	21	バレエ音楽
8	バレエらしいシーン	22	全体のストーリー
9	それぞれの役が持つ独特の雰囲気	23	物語性
10	バレエ団の歴史や組織	24	舞台装置などのステージ構成
11	ダンサーの経歴	25	髪飾りや小道具などの装飾品
12	技術の成り立ち	26	オーケストラ
13	作品の歴史的背景	27	動きの激しさ
14	ダンサーの表現力		

3. プロダクト構造分析

上記の27項目のデータに因子分析（最尤法・プロマックス回転）を施したところ、オーソドックスな固有値基準において8つの因子が抽出された（累積寄与率：60.97%）。8因子の中のそれぞれの項目は、他の因子に.40以上の負荷量を持つ項目が存在しておらず、比較的独立したプロダクトが抽出されていることが明らかとなった。しかし、一項目のみで構成される因子があることや、項目間に共通性が見られず解釈困難な因子が存在することから8因子を採用することは不相当と判断した。引き続きもっとも因子の解釈が好ましく納得性の高いものを探索し、解釈可能性において、因子数を5（最尤法：プロマックス回転）に固定した因子分析の結果をプロダクト構造の因子として採用した。累積寄与率は50.44%であった。探索的因子分析のときと同様に、負荷量が0.40に満たない項目として「動きの激しさ」「ダンサーの柔軟性」の2項目を除いた。（表8）

Factor 1 は、ダンサーの動きに注目しており「動き」「踊り」というキーワードが浮かび上がる。動きの質や比較的目につきやすいクラシックバレエの技術が含まれていることから「運動

因子」と命名した。Factor 2 は、主要なダンサーの周辺にあるものを視覚的にとらえたものが多い。項目として主人公の背景となるコールドダンサーや、舞台を彩る飾りや音に関するものが存在しており「装飾因子」と命名した。Factor 3 は、ダンサーの表現力に関するものによって構成されており「表現因子」と命名した。Factor 4 は、バレエそれ自体、作品やダンサーの歴史や経歴などの知識が含まれており「背景因子」と命名した。Factor 5 はストーリー性に関するものであり、「物語因子」と命名した。さらに、プロダクト構造として図式化するため、因子間相関についても分析した（表9）。その結果、Factor 1 と Factor 2、Factor 1 と Factor 3 の相関が比較的高く、Factor 5 は他の因子との相関が低いことが明らかとなった。

表8：因子構造と負荷量

	F1	F2	F3	F4	F5	Orthogonal のアルファ
	運動因子	装飾因子	表現因子	背景因子	物語因子	
手足の動き	.847					.811
動きの美しさ	.708					
動きの滑らかさ	.701					
主人公の踊るシーン	.689					
有名なダンサーの踊り	.646					
それぞれの役が持つ独特の雰囲気		.719				.844
コールドダンサーの踊り		.710				
装飾や小道具		.665				
バレエらしいシーン		.638				
男性ダンサーの踊り		.623				
マイムの意味		.622				
オーケストラ		.591				
舞台装置		.479				
バレエ音楽		.438				
衣装		.415				
ダンサーの演技力			.863			
役へのなりきり			.829			
ダンサーの表情			.733			
ダンサーの表現力			.710			
バレエ舞の歴史や経緯				.985		.633
技術の成り立ち				.590		
作品の歴史的背景				.465		
ダンサーの経歴				.431		
全体のストーリー					.992	.729
物語性					.606	
寄与率(%)	13.372	4.617	17.737	5.642	3.364	

表9：因子間相関

	F1:運動因子	F2:装飾因子	F3:表現因子	F4:背景因子	F5:物語因子
F1:運動因子	1.000	0.585	0.538	0.360	0.196
F2:装飾因子	0.585	1.000	0.475	0.476	0.384
F3:表現因子	0.538	0.475	1.000	0.294	0.325
F4:背景因子	0.360	0.476	0.294	1.000	0.281
F5:物語因子	0.196	0.384	0.325	0.281	1.000

V. 考察

1. プロダクト構造の図式化

上記の結果を受け、ダンス映像のプロダクト構造として各因子の関係について図式化を試みる。本研究では、プロダクト構造を視覚的に捉え

る図を構成するにあたり、先行研究にあげた宇土（1993,p 1-6）とChelladurai（1994,p 7-21）に共通しており、またプロダクト構造に焦点を合わせた諸研究（原田ら,2004,p22-46;高橋ら,2011,p253ほか）でも採用されている「中核-周辺（拡大要素）」という対応概念を参考に

した^{注4)}。齋藤（1999,p6）は,みるスポーツの中核をさらに「スポーツレベル」と「エンターテインメントレベル」に二分し,このうちの「エンターテインメントレベル」のなかに「競技場でみることの便益」を挙げている（図1参照）。これは,本研究に置き換えると「スポーツ映像でみることの便益」であり,DVDという視覚教材ならではのプロダクト,つまり見ないとわからないもの,テキスト資料だけでは十分とはいえないものである。本研究では,「F1:運動因子」及び「F2:表現因子」がこれに相当すると考えた。そして周辺に,「F3:装飾因子」「F4:背景因子」及び「F5:物語因子」を配置した。これらのプロダクトは,単に映像を見て動きや表情を見るだけでなく,バレエ作品やダンサーについての知的好奇心を満たし,鑑賞経験をより豊かにするものである。

直接観戦によるスポーツをスポーツプロダク

トととらえて分析してきた先行研究と比較すると,DVDコンテンツのプロダクト構造の場合,周辺に位置付けられたプロダクトは直接観戦スポーツでいうところの試合内容の部分構成するものであり,同じく中核としてとらえられてきたことが分かる。さらに,齋藤（1999,p15）は,みるスポーツのプロダクトを把握し,競技会ごとの特性を分析した際,このような手続きはマーケティング戦略立案に有効な資料であるとし,「中核的便益が高い製品がみるスポーツに要求されると思われる」と結論付けている。このことから,中核的便益の内容やレベルを事前に知ることのできるDVD映像はスポーツの見方を提供する側が事前にコントロールすることが可能となり,運動の側面から注目したい場合,物語のように鑑賞したい場合など多様な楽しみ方や学習の方向性を見出すことができると示唆される。

図1：みるスポーツの中核的便益の理論的分類 齋藤（1999）より転載

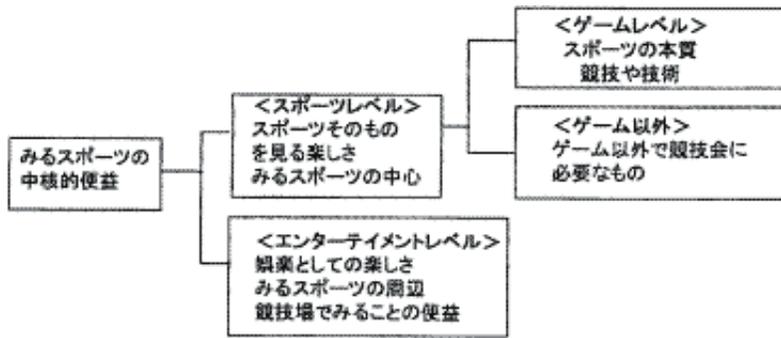
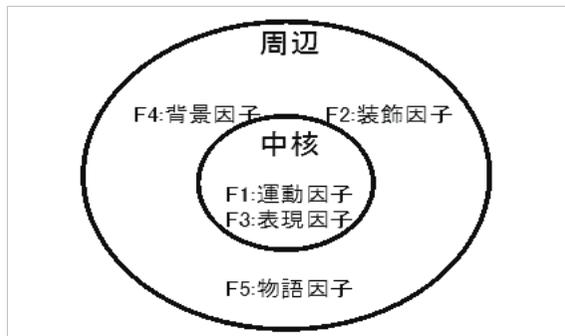


図2：バレエDVDのプロダクト構造



2. まとめ

図2のようにプロダクト構造を図式化すると、それはダンス必修化のねらいとほぼ重なることが指摘できる。ダンスが体育に取り入れられている以上「運動因子」とされた動きを見たり、模倣したり、披露したりすることが基本となり、その技術を磨き、体力的側面からダンスをとらえる必要がある。これはとりわけフォークダンスや現代的なリズムのダンスでは重要になる。ダンス授業の代表的な指導書であるダンス指導ハンドブック（日本女子体育連盟，2011）のなかでも、これらのジャンルのダンスには細かな動きの事例がみられる。しかし、それだけでは十分とはいえ、指導要領でもイメージをとらえた表現が重視されているように、「表現因子」が不可欠な学習課題となる。とくに、するスポーツとしてのダンス授業では創作ダンスが表現性を学ぶ場であり、DVD等での鑑賞授業（みる授業）を通して、トップレベルのダンサーの演技力や役へのなりきり、表情や表現力を共感的に理解することが創作ダンスの実技における表現性を大きく変容させることが期待できるのではないかと考える。

また、現在のダンス授業では踊ることに対する技能と意欲によって生徒を評価しているが、身近にあるDVD等を利用してみる授業を行うことで、ダンスに関するより広範で深い知識を学ぶことが可能になる。また鑑賞者としての技能や意欲をもダンス授業における学習評価の観点とすることが可能になるだろう。また、踊る技能・意欲とみる技能・意欲の統合を構想することができれば、生涯にわたってダンスに触れる喜びを享受できるようになるためのダンス教育が可能になるだろう。

また、現在「みる」ことを評価するのは、生徒間での発表会などである場合が多い。しかし、中核であると考えられる運動性や表現性は、一流の作品と生徒が作った作品とは全く質の異なるものである。授業の中でそのどちらも体験できれば、「みる」経験が豊かになるだけでなく、トップレベルの運動性や表現性を、自己のそれらとの対比で理解することができるだろう。

直接舞台を見に行くということがどんなにすばらしい経験になるとわかっていても、現実の体育授業の範囲内ではとても難しいことである。映像教材の積極的な導入は、このジレンマを解消するための有効な手だてであると考えられる。さらにこうした「運動因子」「表現因子」を含め、各プロダクト要素に特化した説明や解説の作成あるいはそうしたテキスト資料の効果を検証する際にも有用であると思われる^{注5}）。先行研究では、みるスポーツのプロダクト構造はより具体的に示され、スポーツプロダクトの質が向上していくことを3次元的に捉えようとするものも存在するが（宇土,1993,p3:齋藤,2004,p27）、本研究ではダンスを題材とした研究であること、さらにはDVDコンテンツのプロダクト構造分析は初の試みであることから「中核」と「周辺」の分析にとどまった。今後、ダンスのジャンルを広げる、あるいは他のスポーツ活動についても取り上げるなど、さらなる検討を加えることで、より詳細な構造を把握する必要がある。また、本研究では大学生や専門学校生を対象としている。これは、予備調査との整合性、ある程度の文章力と見方に関する記述が求められるといった調査デザインの限界によるものであった。感想文の記述や解説の理解といった作業を必要としており、その際の言語能力や文章力に大きな差異があることは望ましくない。また、生涯スポーツを見据え、学校教育以降のバレエとの関わりに繋がることを期待し、中高校生ではなく大学生への調査を行った。しかし、本研究では大学生を対象としているため今後中学生を対象とする場合には更なる検討を行い、この世代を対象とした調査が必要であろう。スポーツ映像の見方は、見ている鑑賞者の数だけあると言っても過言ではない。しかし、鑑賞者の立場から見方を整理し各々の特徴を把握することは「ただ見せるだけ」であったスポーツ映像を「どのように見せるか」というはっきりとしたねらいをもった教材として認知させることにもつながる。そのような教材開発が成立し、効果的なみる授業が構想され、する授業（すなわち実技）との統合の可能性が見出されたとき

には、する授業における知識・理解、技能、関心・意欲・態度、思考・判断・表現の広がりや深まりも期待できるだろう。

注

- 1) 現在、体育授業で行われるダンスのジャンルは大きく「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の三つに大別される。クラシックバレエはこのいずれにも属しておらず、基本的に学校体育の教材として想定されているものではない。クラシックバレエは、ダンス・バレエのジャンルの一つにすぎないが、それは総合芸術と呼ばれ、多くの独舞・群舞からなる無歌詞舞踊劇として、舞踊における中心的、根本的な領域と考えられている。また、身体の形を表す言葉、技法の用語の定義が他のダンスジャンルに比べ統一されており、研究という文字テキストを通して共通理解を得ることに向いている点、古典作品と呼ばれるバレエ作品は芸術として確立されており鑑賞を目的とする本研究に適している点を考慮し、DVD鑑賞の題材として適当であると判断し採用した。また、本研究が文章力や言語による分析・理解に大きく頼るものであり、バレエのもつ世界共通の動きや技術の名称、作品解釈が必要不可欠であった。今後、バレエ以外のダンスを対象とする際、こうした共通理解のあいまいな部分に対する分析・理解が大きな課題となると予想される。
- 2) バレエDVDの鑑賞を行う授業では「パリオペラ座バレエ『ラ・シルフィード』」(コロンビアマミュージックエンタテイメント)を用いた、DVDすべてを授業時間内にみることは出来ないため、全体のあらすじを壊さないよう留意し鑑賞箇所を決定した。「結婚を控えた青年が、あるとき美しい妖精に魅せられ、追い求めた末に婚約者も妖精もすべてを失ってしまう」というあらすじを全てのグループに説明した。鑑賞した箇所は、1幕ではスコットランドの農村、主要ダンサーの登場シーン、2幕のシルフィードの戯れる森である。クラシックチュチュ(衣装)やコールドバレエ(群舞)のほか、目を引くであろうマイムや回転、ジャンプのシーンをどのグループにも差が出ないように一部を早送りし授業時間内に収めた。会場は普段バレエの授業で使用する室内運動施設にスクリーンを設置し、床に座った形で鑑賞した。音響はDVDプレイヤーにスピーカーを接続し会場全体に聞こえるようあらかじめ音量を設定した。
- 3) 形態素分析とは、単語として意味のわかる最小単位に切り、その出現頻度をみる分析方法である。
- 4) 近年のスポーツプロダクトの構造と機能の観点はコトラー(2002)の製品概念を基本に比較・考察する方法論が見受けられる(高橋ら,2011,p246)。ただし、原田(2004,P40)はプロスポーツの観戦のプロダクトをコトラーによる5つのプロダクトレベルに明確に当てはめることは困難であるとし、見るスポーツのプロダクトを中核要素と拡大要素に大別するマリンの図式を紹介している。
- 5) 例えば、現在筆者が取り組んでいる鑑賞授業の研究では、解説内容として、①スポーツプロダクト構造の中核をなす「運動因子」「表現因子」を説明する「技術・ダンサーの解説群」、②周辺を説明する「物語・環境解説群」、③特に解説を行わない「統制群」という3つの群を設定し鑑賞者の態度変化を分析している。さらに、鑑賞者間のコミュニケーションを生む際の話題提供の側面としても本研究の結果に示した5つの側面を提示し研究を進めている最中である。

文献

- 舞踊教育研究会編(1991)舞踊学講義.大修館書店.
- 原田宗彦・藤本淳也・松岡宏高(2004)スポーツマーケティング.大修館書店.

- 橋本良明 (1999) 映像メディアの展開と社会心理学. 北樹出版.
- 石垣 亨・神田每実・二瓶浩明・幸田 律・山本祐実 (2003) 舞踊鑑賞者の心拍変動解析における舞台照明の影響: 美術学, 文学, 舞踊および生理学による新授業展開. 愛知県立芸術大学紀要33:63-72.
- 松尾太加志・中村知靖 (2002) 誰も教えてくれなかった因子分析. 北大路書房.
- 宮本乙女 (2005) 創作ダンス授業における学習者によるパフォーマンス評価の研究. お茶の水女子大学紀要34:65-86.
- 文科省 (1999) 我が国の文教施策: 進む「教育改革」. 大蔵省印刷局
- 村上宣寛 (2008) 心理尺度のつくり方 [第3版]. (株) 北大路書房
- 中村恭子 (2009) 中学校の男女ダンス必修化の課題: 中学校教員を対象とした調査にもとづいて. 順天堂スポーツ科学研究 1 (1) :27-39.
- 日本女子体育連盟編著 (2009) 保存版! ダンス指導ハンドブック: 初めての指導・一歩進んだ指導. (社) 日本女子体育連盟
- 日本女子体育連盟編著 (2011) 保存版! ダンス指導ハンドブックⅢ: 単元とさらに進んだ素材集-. (社) 日本女子体育連盟
- 小山さなえ・畑 攻・齋藤隆志・小野里真弓・水上雅子 (2004) 「するスポーツ」と「みるスポーツ」のプロダクト構造と機能: プロ野球とレッスン・スクールの比較分析と考察. 日本体育学会大会号55:364.
- フィリップ・コトラー (2002) 恩蔵直人監修 コトラーのマーケティング・マネジメント基本編. ピアゾン・エデュケーション. 225-227
- P.Chelladurai (1994) Sport Management: Defining the field, European Journal for Sports Management 1, p 7-21
- 佐伯聰夫 (1999) スポーツ観戦論序説: 問題の所在と観戦文化論の可能性 (特集 スポーツ観戦論~スポーツをく見る・視る・観る>を考へる~). 体育の科学49 (4) :268-273.
- 齋藤隆志・新出昌明・川崎登志喜・中西純司 (1996) みるスポーツのプロダクト構造に関する実証的研究. 日本体育学会大会号44:385.
- 齋藤隆志・新出昌明・川崎登志喜 (1998) みるスポーツプロダクト構造の実証的研究: 特にスポーツマーケティング論としての中核的便益の因子構造について. いわき短期大学紀要31:23-38.
- 齋藤隆志 (1999) みるスポーツプロダクトの中核的便益構造と競技会別特徴. 体育・スポーツ経営学研究15 (1) .
- 齋藤隆志 (2004) みるスポーツプロデュース論をめぐる問題整理: 宇土プロデュース論の検討を中心に. 体育・スポーツ経営学研究19 (1) .
- 齋藤隆志 (2013) 観戦行動の概念枠組みの検討: 観るスポーツの文化価値創造マネジメントを視野に入れて日本女子体育大学紀要43: 117-127
- 高橋和子 (2008) なぜ今ダンス必修化なのか. 体育科教育56 (3) :20-23
- 高橋豪仁・鈴木渉・仲澤真 (2011) スペクタースポーツのプロダクトと観戦者の満足に関する事例報告: 大阪エヴェッサのホームゲーム観戦者調査からスポーツ産業学研究21 (2) :245-256,
- 友添秀則 (2004) スポーツの楽しさを保障する体育の授業づくりの意義: 「行う」「見る」「支える」「知る」楽しさから. 体育科教育52 (11) :18-21
- 宇土正彦 (1992) 日本体育・スポーツ経営学会第15回キーノートレクチャー, スポーツプロデュースの課題: スポーツ経営・学校体育への応用を目指して. 体育・スポーツ経営学研究10 (1) :63-73.
- 宇土正彦 (1993) スポーツプロデュースとスポーツプロダクト. 体育・スポーツ経営学研究10 (1) :1-6.
- 上原信子 (2002) 見るスポーツが高校生に与える影響: ワールドカップがもたらしたもの. 研究紀要/東京学芸大学附属高等学校40:73-83.